

西葛西のインド人コミュニティと サードプレイス

東京・江戸川区の西葛西は、日本におけるインド人コミュニティの最も著名な集積地であり、「リトル・インディア」とも称される。このコミュニティは、1990 年代後半のコンピューターの 2000 年問題への対応を機に、インドから呼び寄せられた IT 技術者らが集住したことに起源を持つ。

東京都の外国人人口統計（2024 年）によれば、江戸川区の外国人数は 4 万 3,389 人と都内では新宿区に次ぐ規模であり、そのうちインド人は中国人に次ぐ 2 位の人口を占める。特に、都内のインド人の約 40% が同区に居住するという事実は、西葛西地域が単なる労働力の受入先ではなく、複合的な生活拠点として機能していることを明確に示している。西葛西の事例は、外国人コミュニティが地域社会に根を下ろし、日本人住民との間で共生を模索する、日本社会の多文化共生を考える上で重要な示唆を与えている。

西葛西のインド人コミュニティの発展は、家族帯同率の高さと教育への強い志向に支えられている。彼らが西葛西を拠点に選ぶ理由の一つは、幼稚園から高校まで一貫教育を提供するグローバル・インディアン・インターナショナル・スクール（GIIS）をはじめとする教育環境の存在だ。高スキル人材である親の多くは、子どもたちに「インド帰国後のキャリアや国際的なキャリアを想定し、英語で学べる環境」を提供することに関心を持っている。

以前は IT プロジェクトに伴う短期滞在が主であったが、現在は居住期間が長期化し、定住化の傾向が顕著になっている。筆者自身の現地調査でも、このエリアにはインド食材店、インド料理のレストランなどが集積していることが観察された。これらの文化的インフラの整備は、コミュニティが地域経済に

根を下ろした安定的な生活基盤を築いている証左である。

また、フィールドワークでは、荒川近くの公園でクリケットを楽しむインド人や、周辺で家族とのんびり過ごす姿が観察さ

れた。この荒川の雄大な景観が、故郷インドのガンジス川に重ねて郷愁を感じさせると言われている。新田 6 号公園に設置されたガンジーの銅像は、コミュニティの精神的なシンボルとして機能している。

西葛西では、多文化共生は特別なイベントではなく、日常の風景となっている。毎年開催されるディワリ祭り（光の祭典）は、地域住民とインド人コミュニティが文化交流を行う重要なイベントである。

しかし、構造的な課題も残る。特に教育面では、中高生になるとインドの競争社会に備えるため、子どもをインドに帰国させて教育を受けさせるケースが観察される。これは、日本の教育制度や進路選択が、国際的なキャリアを目指すインド人コミュニティの戦略と完全に一致していないこと、及び公教育のサポート体制が、コミュニティの期待に十分応えられていない可能性を示唆している。

西葛西モデルは、外国人材の受け入れに際し、単なる「労働力」としてではなく、その生活、教育、そして文化的なアイデンティティに焦点を当て、家族の定着を支援することや「サードプレイス」の重要性を示している。

※本研究は JSPS 科研費 JP23K01737 の助成を受けたものです。

（くもん たかし・アジア研究所教授）



※ 研究所だより ※

夏休みが終わり、秋学期の活動に向けての「仕込み」を精力的に行っているところです。

今年度で活動を終了する 4 つの研究プロジェクトは以下に掲げる通りです。それぞれ最終報告書提出に向けて調整を行っているところです。

「グローバルサウスと ASEAN」

（代表 大泉啓一郎）

「アジアの社会保障の新展開」

（代表 大泉啓一郎）

「2020 年代中盤における韓国経済社会の諸問題」

（代表 奥田聡）

「インド太平洋における貿易投資政策と経済安全保

障の行方 (2)」

（代表 久野新）

秋学期には、セミナー「アジアウォッチャー」を 10 月、12 月に予定しており、年明けにも 1 回開催する予定です。学内研究者の交流の場として毎年開催している「アジア研究サロン」も年内に開催いたします。研究奨励賞の授与も予定しています。このほか、所報、紀要の発表を控えております。今回ご紹介した研究プロジェクトの報告書と併せ、どうぞご期待ください。

おかげさまで私どもの所報は今号で 200 号を迎えました。今後とも皆様のご愛読をお願いいたします。

（おくだ）